"belleves" とされていたことカらも内容に分力る。 つまり	無障」 とに樹々に清沪に表現しているか「真理の意と解して
「追求」とは先の英訴では "investigate" とされ「受圧」は	「まえ、「三〇〇二」「冒毛沢子」を「第二者をおば近に」。
「そこう」にで、ということにしていていていていていています。(同前同頁)	(『青さ青こ台』を「まった」「白女書」。 こううこ ミミン道理心の無限に関係する区域を表するなり。
宗教心の関係するは、之を受用するにあり。	表する者と謂うて可なり。而して、其の中に於いて、唯だ哲学は、
は、大いに異なり。道理心の関係するは、之を追求するにあり。	関係するなり。彼の諸多の学問は、皆な道理心が関係する区域を
然るに、道理心が無限に関係すると、宗教心が無限に関係すると	らず。然れども、道理心は無限にのみ関係するに非ず、有限にも
にある、と清沢は述べる。	に関係し得るに非ずや。曰く然り、道理心も無限に関係なきにあ
では相違点はどのようになるか。それは「関係」の持ち方	無限に対向するものは、宗教心のみに限らず、道理心も亦た無限
で行っていることには注目しなければならないだろう。	「関係」を持つという、まさにそのこと自体である。
る。そのような宗教哲学の基幹的問いを清沢が処女作の冒頭	もに「無限」との「関係」にある。まず共通点は「無限」と
なのである。これはさらに広汎的に語れば信と知の関係とな	性を比較する。清沢によれば両者の共通点、そして相違点と
比較が具体的に宗教と哲学の比較となるのはそのような理由	骸骨』第一章「宗教と学問」で「宗教心」と「道理心」=理
とする学である。つまり、清沢の「宗教心」と「道理心」の	学字彙』を参照すると理性のことを指す。清沢は『宗教哲学
の中でも哲学だけは理性を根底としながらも唯一無限を対象	本 ("THE SKELETON OF A PHILOSOPHY OF RELIGION") や、『哲
問の基礎となり、主には有限をその対象とする。しかし、そ	「道理心」が語られる。「道理心」とは、清沢自身による英訳
問題はない。「道理心」とは理性であるから、それは全ての学	清沢満之の『宗教哲学骸骨』では「宗教心」との対比で

印度學佛教學研究第五十四巻第一号 平成十七年十二月

清沢満之の理性観

村 晃

徳

田

にむしろ真意があったと思われる。清沢は次のように述べる。	は豈に道理の研究を拒まんや
にはその性質上、根本的問題が潜んでいたことを述べること	信仰を根本と為すと雖ども若し夫れ宗教内の事に疑あるに当りて
ば清沢の真意はそこにあるのではない。「道理心」つまり理性	夫れ然り豈に夫れ然らんや 宗教の宗教たる所以の本性に於ては
ればそのように聞こえる。しかし、『宗教哲学骸骨』を読め	それに対し清沢は次のように答えていた。
信仰を棄てゝ道理を取るべきなり」との言葉のみを参考とす	いることに気をつけなければならない。
信頼し、その導くところに従事すればいいのか。先の「寧ろ	教においては、どうであろうか、という問いの構造になって
では道理心、理性は万能なのか。換言すれば人間は理性を	通常の宗教は道理を受け付けないのである。では、「真の」宗
てくる。	に世間的宗教観があったことを示唆しているだろう。つまり、
ほど強い信頼を道理、つまり理性においていたのかが伝わっ	理を受け付けないのか、という問いの背後には、清沢の念頭
「信仰を棄てゝ道理をとるべき」であるとの言葉からも、どれ	ここでは「真の」という言葉に注意したい。「真の」宗教は道
(同前同頁)	(同前七頁)
を正すに方あり(信仰は之を改むるに軌なければなり	果して然らば真の宗教内には全く道理を許さざるや
の道理と真の信仰とは到底一致に帰すべきものなれども道理は之	のような問いを提起する。
ことあらば寧ろ信仰を棄て、道理を取るべきなり(何となれば真	このように宗教と哲学の関係を位置付けた上で、清沢は次
背したる信仰を要すと言ふにあらず 若し道理と信仰と違背する	(同前同頁)
是に於て注意すべきは宗教は信仰を要すと雖ども決して道理に違	べし
いてさらに続けられる。	故に之を通言すれば、哲学の終る所に、宗教の事業始まると謂ふ
ろう。そして清沢の言葉は、信仰に対する道理の優位点につ	論が出ることも当然である。
が起こる。それは例えば教義についての疑問が主となるであ	理心」=理性)の差異だと表現できよう。従って次のような結
宗教内において理性と衝突がある場合、右で言われる「疑」	象を、始発とするのか(=「宗教心」)、終着とするのか(「道
宗教が宗教たる所以は、もちろん信仰にある。しかし、その	る立場との差異だといえる。これは「無限」という共通の事
(同前同頁)	「宗教心」と理性は「無限」を推究する立場と信からはじま
	清沢満之の理性観(田)村)

— 238 —

受容する途はないのであろうか。ここで理性的認識に一つのた。 ことができないのである。では理性が真理に到達し、それをの人類である。これは、真理の探究にとって致命的であれた。 には、さらにその根拠の根拠が必要となる。これは永遠に止まる。 にはしまることができないのであるから、そこに落着する。 にはしまることができないのであるから、そこに落着する。 にはしまる。 これは、真理の探究にとって致命的であれ上( ものを知ろうとする。そのとき現象の一根拠を見出せ ものをしても、は具体できるだろう。例えば、れが		ものなり 故に甲を認むるに当りては其理由とする乙を求め乙を 仰にに道理の一方に固着すれば或は終に宗教の位置に達する能はざる のでご蓋し道理なるものは事物に当りて常に指の世間不完全」である。なにより ない 「性質不完全」であることも同時に認知していたのであ 倶敷 さん 「性質不完全」であることも同時に認知していたのであ 倶敷 ないども道理は其性質不完全を免れざるものなるが故に人若し単 質的
た。 た。 た。 、 しかし理性の有識者、ことに仏説を否定する学者であっ の人々とは、世の有識者、ことに仏説を否定する学者であっ れ上の問題として収まるものではなかった。何故ならば清沢 机上の問題はいわば理性の性質上の問題であり、原理論であ れが道理は「信仰に依」るというものだ。	ある。そのとき、道理には一つの新しい性質が付帯する。その本性から外れてしまう。それを先に質的転換と述べたので道理が「休止立脚」の点を求めることは、「追究」という道理(同前同頁)	仰に関して然るなり 仰に関して然るなり 御い転換が迫られる。つまり、これが真理であると「知る」 留的転換が迫られる。つまり、これが真理であると「知る」 和は知から信への移相だと言えよう。ここにおいて、 るものとを甄別して信仰の整調を得しむるは即ち正に道理の本領 たるなり 是れ只だ宗教上の信仰に関してのみにあらず一切の信 たるなり 是れ只だ宗教上の信仰に関してのみにあると「知る」 仰にして然るなり 御い転換が迫られる。 でまり、これが真理であると「知る」 四のにして、 二のののにののにある。 二のの信仰に関してのみにあらず一切の信 二ののではない。 二のの移相だと言えよう。 二のの名ののではる 二のの名ののにのるにある。 二のの信仰に関してのみにあらず一切の信 二ののではない。 二のの移相だと言えよう。 二ののる 二のの名ののにのる 二のの信仰に関してのみにあると「知る」 四のたる 二ののにのる 二のの合 二のの名の 二のの 二の 二のの 二の 二の 二の 二のの 二のの 二のの 二のの 二のの 二の 二のの 二の 二のの 二のの 二のの 二のの 二のの 二のの 二のの 二のの 二の 二のの 二のの 二のの 二のの 二のの 二のの 二のの 二のの 二の 二の 二の 二のの 二のの 二の 二の 二の 二の 二のの 二の 二のの 二の 二のの 二の

清沢満之の理性観(田

村

— 239 —

世の学者多く、比の理を了印せず。寺こ伐が国当诗未熟学者、徒清沢満之の理性観(田(村)	先
に地球説、進化論を提して、以て仏説を非難せんとす、大早計も	思
亦た甚だしといふ可し。	清
(「宗教哲学骸骨自筆書入」『全集』第一巻三七頁)	٢J
道理心が一方的にはたらけば、それはかえって真理を見失う	
ことになりかねない。さらに清沢の言葉を以て説明するなら	て
ば、相対有限である人智をもって、「仏説」つまり「無限」と	は
しての真理を非難することは、分限の逸脱なのだとも言えよ	理
う。これらの言葉からも清沢の理性批判は原理論だけではな	č
く、目の当たりにしていた現実の状況にも由来していたこと	特
が分かるのである。	要
これまで簡単に清沢が理性の評価を如何に行っていたのか	そ
について述べてきた。清沢の思想、特にいわゆる「哲学期」	τ
の思想を語るときに常に引用されるのが、これら第一章の記	あ
述であることは周知の通りである。特に先にも引いた「若し	が
道理と信仰と違背することあらば寧ろ信仰を棄て、道理を取	
るべきなり」が有名である。ここは従来、二つの点から注目	р
されてきた。一つは、清沢の理性への強烈な信頼である。「信	Ø
仰を棄て」るとまで言い切るこの文章は、清沢の思想の柔軟	
性を示すものとして評価されてきた。もう一点は、その後の	
清沢の思想的表現との隔たりである。後の清沢は絶筆「我信	
念」に代表されるように、信仰の表現が主となる。よって、	

	)展開された青さり黒生見こついては、そり後の胀売と変化『宗教哲学骸骨』第一章の「宗教心」と「道理心」をめぐ	かえるであろう。	こみると、理性のみを信奉していたどころか、その「性質」	しかし、今まで述べてきたように、清沢のテキストに即し	3°
		の長期ないに覚せつ理生見につっては、その後の胀売と変化『宗教哲学骸骨』第一章の「宗教心」と「道理心」をめぐ	○長司にもに置べつ理住見とついては、そり後り継売と変との表示されていた。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、その後の清沢の著述において、その思索の土台として位置していたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、ていたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、ていたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、であるいは文明と宗教の関係を問う論述などにも、それはうかがえるであろう。	■ その後の 清大の に 常 教 哲 学 骸 骨 し て いたことだ。 今 回 は 紙 幅 の 都 合 で 勝 常 し て い た こ と ボ 行 し て い た こ と ボ の は の は て し て い た の は 、 寺 間 で あ る こ と が 分 か る だ ろ う 。 そ し て 位 置 し て い た 西 豊 本 の は 、 そ の は 、 そ の は て 、 そ の は 、 そ の は 、 そ の は 、 そ の は 、 そ の は 、 そ の は 、 そ の は 、 で あ る こ と が 分 か る た る 、 そ し て 位 置 し て い た 、 そ し て 、 そ し て 、 そ の に 、 来 の は 、 た の に 、 そ し て に 一 て し て ひ に で き 本 た 、 そ し て で た で 、 そ し て い た 、 そ し て で た 、 そ し て で た 、 そ し て む た 、 そ し て い た 、 そ し て で し て い た 、 そ し て で で で し て で で し て で で で 、 、 そ し て で で で 、 、 そ し て で で で 、 、 そ し て で で で 、 、 そ し て で で 、 、 そ し て で で 、 、 そ の 「 性 質 」 、 、 、 、 そ の 「 世 覧 、 、 、 そ の 「 世 覧 、 、 、 、 、 、 そ の 「 世 覧 、 、 、 、 、 、 、 、 そ の 「 世 覧 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、	しましたに、 しかし、今まで述べてきたように、 たりをり継売したとして しかし、今まで述べてきたように、 清沢の寿述において、その思索の土台として位置し たの点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想を この点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想を この点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想を この点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想を において、その思索の土台として位置し たいたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、 あるいは文明と宗教の関係を問う論述などにも、それはうか あるいは文明と宗教の関係を問う論述などにも、それはうか あるいは文明と宗教の関係を問う論述などにも、それはうか たのその後の清沢の著述において、その思索の土台として位置し たいたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、 しかし、今まで述べてきたように、清沢のテキストに即し しかし、今まで述べてきたように、 たのをのまたのでは、 たのをして たのとのた。 たのに、 たのにのた。 たのにのた。 たのににして たのににのた。 たのには、 たのににして たのにのた。 たのにのた。 たのにのた。 たのににして たのた。 たのににして たのにのた。 たのににして たのににして たのにた。 たのににして たのににのた。 たのににのた。 たのににして たのににして たのにのた。 たのには たのににして たのた。 たのににして たのにた。 たのににして たのにして たのに たのにに たのに たのに たのに たの たの たの たの たの たの たの たの たの たの
の両方から今後も研究される必要があると思われる。り展開された清沢の理性観については、その後の継続と変化『宗教哲学骸骨』第一章の「宗教心」と「道理心」をめぐがえるであろう。	がえるであろう。		ていたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、その後の清沢の著述において、その思索の土台として位置し要なことは『宗教哲学骸骨』で展開されていた理性批判は、特徴づけるのは不適当であることが分かるだろう。そして重この点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想をこの点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想をして「不完全」であると根底的に問題を指摘していた。そして	ていたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、その後の清沢の著述において、その思索の土台として位置しての点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想をこの点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想を理性の暴走が行き着く先を、現に学者達に看取していた。そしててるると、理性のみを信奉していたどころか、その「性質」	ていたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、その後の清沢の著述において、その思索の土台として位置したの点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想をこの点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想をこの点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想をしていたどころか、その「性質」しかし、今まで述べてきたように、清沢のテキストに即し
の両方から今後も研究される必要があると思われる。り展開された清沢の理性観については、その後の継続と変化『宗教哲学骸骨』第一章の「宗教心」と「道理心」をめぐがえるであろう。	がえるであろう。 あるいは文明と宗教の関係を問う論述などにも、それはうか	あるいは文明と宗教の関係を問う論述などにも、それはうか	その後の清沢の著述において、その思索の土台として位置し要なことは『宗教哲学骸骨』で展開されていた理性批判は、特徴づけるのは不適当であることが分かるだろう。そして重この点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想を埋性の暴走が行き着く先を、現に学者達に看取していたのだ。は「不完全」であると根底的に問題を指摘していた。そして	その後の清沢の著述において、その思索の土台として位置し要なことは『宗教哲学骸骨』で展開されていた理性批判は、特徴づけるのは不適当であることが分かるだろう。そして重生性の暴走が行き着く先を、現に学者達に看取していたのだ。てみると、理性のみを信奉していたどころか、その「性質」	その後の清沢の著述において、その思索の土台として位置し要なことは『宗教哲学骸骨』で展開されていた理性批判は、特徴づけるのは不適当であることが分かるだろう。そして重生性の暴走が行き着く先を、現に学者達に看取していたのだ。せしていると、理性のみを信奉していたどころか、その「性質」しかし、今まで述べてきたように、清沢のテキストに即し
の両方から今後も研究される必要があると思われる。り展開された清沢の理性観については、その後の継続と変化『宗教哲学骸骨』第一章の「宗教心」と「道理心」をめぐずえるであろう。	がえるであろう。あるいは文明と宗教の関係を問う論述などにも、それはうかあるいは文明と宗教の関係を問う論述などにも、それはうかていたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、	あるいは文明と宗教の関係を問う論述などにも、それはうかていたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、	要なことは『宗教哲学骸骨』で展開されていた理性批判は、特徴づけるのは不適当であることが分かるだろう。そして重この点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想を埋性の暴走が行き着く先を、現に学者達に看取していたのだ。は「不完全」であると根底的に問題を指摘していた。そして	要なことは『宗教哲学骸骨』で展開されていた理性批判は、特徴づけるのは不適当であることが分かるだろう。そして重この点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想を埋性の暴走が行き着く先を、現に学者達に看取していた。そしててみると、理性のみを信奉していたどころか、その「性質」	要なことは『宗教哲学骸骨』で展開されていた理性批判は、特徴づけるのは不適当であることが分かるだろう。そして重生性の暴走が行き着く先を、現に学者達に看取していたのだ。は「不完全」であると根底的に問題を指摘していた。そしててみると、理性のみを信奉していたどころか、その「性質」しかし、今まで述べてきたように、清沢のテキストに即し
の両方から今後も研究される必要があると思われる。『宗教哲学骸骨』第一章の「宗教心」と「道理心」をめぐがえるであろう。『宗教哲学骸骨』第一章の「宗教心」と「道理心」をめぐがえるであろう。	がえるであろう。 あるいは文明と宗教の関係を問う論述などにも、それはうかていたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、その後の清沢の著述において、その思索の土台として位置し	あるいは文明と宗教の関係を問う論述などにも、それはうかていたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、その後の清沢の著述において、その思索の土台として位置し	特徴づけるのは不適当であることが分かるだろう。そして重この点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想を埋性の暴走が行き着く先を、現に学者達に看取していたのだ。は「不完全」であると根底的に問題を指摘していた。そして	特徴づけるのは不適当であることが分かるだろう。そして重この点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想を埋性の暴走が行き着く先を、現に学者達に看取していたのだ。は「不完全」であると根底的に問題を指摘していた。そしててみると、理性のみを信奉していたどころか、その「性質」	特徴づけるのは不適当であることが分かるだろう。そして重この点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想を埋性の暴走が行き着く先を、現に学者達に看取していたのだ。は「不完全」であると根底的に問題を指摘していた。そしててみると、理性のみを信奉していたどころか、その「性質」しかし、今まで述べてきたように、清沢のテキストに即し
の両方から今後も研究される必要があると思われる。の両方から今後も研究される必要があると思われる。その後の清沢の著述において、その思索の土台として位置し安なことは『宗教哲学骸骨』で展開されて清沢の理性観については、その後の満沢の著述において、その思索の土台として位置し要なことは『宗教哲学骸骨』で展開されていた理性批判は、	がえるであろう。がえるであろう。それはうかでいたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、その後の清沢の著述において、その思索の土台として位置し要なことは『宗教哲学骸骨』で展開されていた理性批判は、	あるいは文明と宗教の関係を問う論述などにも、それはうかていたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、その後の清沢の著述において、その思索の土台として位置し要なことは『宗教哲学骸骨』で展開されていた理性批判は、	この点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想を埋性の暴走が行き着く先を、現に学者達に看取していたのだ。は「不完全」であると根底的に問題を指摘していた。そして	この点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想を埋性の暴走が行き着く先を、現に学者達に看取していたのだ。は「不完全」であると根底的に問題を指摘していた。そしててみると、理性のみを信奉していたどころか、その「性質」	この点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想を埋性の暴走が行き着く先を、現に学者達に看取していたのだ。は「不完全」であると根底的に問題を指摘していた。そしててみると、理性のみを信奉していたどころか、その「性質」しかし、今まで述べてきたように、清沢のテキストに即し
の両方から今後も研究される必要があると思われる。の両方から今後も研究される必要があると思われる。そして重くで、その後の清沢の著述において、その思索の土台として位置しその後の清沢の著述において、その思索の土台として位置しがえるであろう。	がえるであろう。かえるであろう。そして重いたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、その後の清沢の著述において、その思索の土台として位置しその後の清沢の著述において、その思索の土台として位置し	あるいは文明と宗教の関係を問う論述などにも、それはうかていたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、その後の清沢の著述において、その思索の土台として位置し要なことは『宗教哲学骸骨』で展開されていた理性批判は、特徴づけるのは不適当であることが分かるだろう。そして重	埋性の暴走が行き着く先を、現に学者達に看取していたのだ。は「不完全」であると根底的に問題を指摘していた。そして	埋性の暴走が行き着く先を、現に学者達に看取していたのだ。は「不完全」であると根底的に問題を指摘していた。そしててみると、理性のみを信奉していたどころか、その「性質」	埋性の暴走が行き着く先を、現に学者達に看取していたのだ。は「不完全」であると根底的に問題を指摘していた。そしててみると、理性のみを信奉していたどころか、その「性質」しかし、今まで述べてきたように、清沢のテキストに即し
の両方から今後も研究される必要があると思われる。の両方から今後も研究される必要があると思われる。そして重この点からも、先の言葉のみを以て清沢のていたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、ていたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、でいたことは『宗教哲学骸骨』であることが分かるだろう。そして重したえるであろう。	がえるであろう。がえるであろう。そして葉のみを以て清沢のこの時期の思想をこの点からも、先の言葉のみを以て清沢の支付しまであることが分かるだろう。そして重たしたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、その後の清沢の著述において、その思索の土台として位置していたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、その後の清沢の諸がのとの時期の思想を	あるいは文明と宗教の関係を問う論述などにも、それはうかていたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、その後の清沢の著述において、その思索の土台として位置し要なことは『宗教哲学骸骨』で展開されていた理性批判は、特徴づけるのは不適当であることが分かるだろう。そして重この点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想を	は「不完全」であると根底的に問題を指摘していた。そして	は「不完全」であると根底的に問題を指摘していた。そしててみると、理性のみを信奉していたどころか、その「性質」	は「不完全」であると根底的に問題を指摘していた。そしててみると、理性のみを信奉していたどころか、その「性質」しかし、今まで述べてきたように、清沢のテキストに即し
の両方から今後も研究される必要があると思われる。 で両方から今後も研究される必要があると思われる。 の両方から今後も研究される必要があると思われる。	がえるであろう。 がえるであろう。 がえるであろう。 がえるであろう。	あるいは文明と宗教の関係を問う論述などにも、それはうかその後の清沢の著述において、その思索の土台として位置し要なことは『宗教哲学骸骨』で展開されていた理性批判は、特徴づけるのは不適当であることが分かるだろう。そして重にしたらとに、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想を埋性の暴走が行き着く先を、現に学者達に看取していたのだ。		理性のみを信奉していたどころか、その	理性のみを信奉していたどころか、その今まで述べてきたように、清沢のテキスト
の両方から今後も研究される必要があると思われる。 しかし、今まで述べてきたように、清沢のテキストに即し しかし、今まで述べてきたように、清沢のテキストに即し しかし、今まで述べてきたように、清沢のテキストに即し いる。	がえるであろう。 がえるであろう。 がえるであろう。	あるいは文明と宗教の関係を問う論述などにも、それはうかていたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、てみると、理性のみを信奉していたどころか、その「性質」でみると、理性のみを信奉していたどころか、その「性質」ていたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、その後の清沢の著述において、その思索の土台として位置してかると、理性のみを信奉していたど。そしてするの後の清沢の著述において、その思索の土台として位置してかると、理性のみを信奉していたど、清沢のテキストに即しいる。	U,	いる。	
の両方から今後も研究される必要があると思われる。 の両方から今後も研究される必要があると思われる。 であると、理性観については、その後の継続と変化り展開された清沢の理性観について、その思索の土台として位置していたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、ていたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、ていたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、であるいは文明と宗教の関係を問う論述などにも、それはうかあるいは文明と宗教の関係を問う論述などにも、それはうかでいたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、でいたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、でいたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、でいたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、でいたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、でいたことが行き着く先を、現に学者達に行いていた。そのものでであることが行きる。	<b>がえるであろう。</b> がえるであろう。	あるいは文明と宗教の関係を問う論述などにも、それはうかていたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、ていたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、ていたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、ていたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、その「性質」いる。	しかし、今まで述べてきたように、清沢のテキストに即しいる。	いる。「哲学期」と「宗教期」にわける根拠の一つとなって	宿沢を「哲学期」と「宗教期」にわける根拠の一つとなって
の両方から今後も研究される必要があると思われる。 「宗教哲学骸骨」第一章の「宗教心」と「道理心」をめぐ 『宗教哲学骸骨』第一章の「宗教心」と「道理心」をめぐ 『宗教哲学骸骨』第一章の「宗教心」と「道理心」をめぐ がえるであろう。	がえるであろう。	あるいは文明と宗教の関係を問う論述などにも、それはうかたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、ていたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、科学、でいたことだ。今回は紙幅の都合で詳述できないが、そして 御賞であると根底的に問題を指摘していた。そして しかし、今まで述べてきたように、清沢のテキストに即し しかし、今まで述べてきたように、清沢のテキストに即し しかし、今まで述べてきたように、清沢のテキストに即し この点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想を この点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想を この点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想を この点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想を この点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想を この点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想を この点からも、先の言葉のみを以て清沢のこの時期の思想を この点からも、先の言葉のみをしてがたことだ。それできたように、 るっとが分かるだろう。そして しかし、今まで述べてきたように、 たいたことだ。	しかし、今まで述べてきたように、清沢のテキストに即しいる。「哲学期」と「宗教期」にわける根拠の一つとなって忠索は棄てられたものと理解されてきたのである。これが、	いる。 宿沢を「哲学期」と「宗教期」にわける根拠の一つとなって思索は棄てられたものと理解されてきたのである。これが、	<b>淯沢を「哲学期」と「宗教期」にわける根拠の一つとなって</b> 忠索は棄てられたものと理解されてきたのである。これが、

(大谷大学講師)

- 240 -

his mind and the actual situation he faced in Kyoto were vastly different. In fact, after returning to Kyoto, Kiyozawa gravely pondered over how the Otani school could be reformed. This plan did not go smoothly, however, and the despondent Kiyozawa, along with comrades, began a reform movement. Although this movement would fail, through this failure the Otani school gradually shifted to a scholarly denomination. Through examining Kiyozawa's life and his relationship with the Otani school, it is obvious that he held that restructuring of the sangha could be done through the restructuring of doctrine. Hence, Kiyozawa's understanding of the sangha can be seen through his own existence as an individual living daily life in the Meiji period, and also in his attempt at modernizing and personifying Shinshu doctrine.

## 47. Kiyozawa Manshi's View of Reason

Akinori TAMURA

On Kiyozawa Manshi's view of reason, there is a famous statement in his first book, *Shūkyō tetsugaku gaikotsu*. In its English translation, *The Skeleton of A Philosophy of Religion*, the passage runs as follows:

If there are two propositions, the one of reason and the other of faith, we should rather take the former instead of the latter.

Based on this statement, it has been suggested that in his early period Kiyozawa considered reason more important than faith. However, we should also note the following statement in the same book.

But remember that the nature of reason is incompleteness, i.e, reason can never be complete in its range or series of propositions, one proposition linking to or depending on the other ad infinitum, so that if any one relies on reason alone, he might never be able to attain the solid resting place of religious belief.

From this, we can understand that Kiyozawa was aware of the problem of reason. Therefore, when we consider Kiyozawa Manshi's view of reason, we must take into account both his appreciation and criticism of reason.